会報 むすび

第 8 号
・発 行 所
栃木県神社庁内
青年神職むすび会
編集委員会
・発 行 人
阿 部 憲
・印 刷 所
下野印刷株式会社
昭和56年12月1日発行

神社の森は心のふるさと！
育てよう　神社の森
呼び返せ！　我が国固有の北方領土

目 次

創立二十周年に向けて……一
青年神職に望むこと……三
四年間をふりかえって
登拝（研修会）……四
北方領土……四～五
パラオ慰霊祭……五～七
海水浴……七
お伊勢まいり道中記……八～十〇
忘れられた日本人の糧……十一～十二
奉仕神社紹介
八坂神社……十三
安住神社……十三～十四
八坂神社（葛生）……十四
安房神社……十四～十五
古峯神社……十五
岩崎神社……十六
上都賀支部懇談会……十六～十七
一都七県野球大会……十七
特別部員名簿……十七
編集後記……十八

創立二十周年に向けて

栃木県青年神職むすび会会長　阿部憲

毎年発刊すべき本会報が、五十三年以降延滞いたしましたこと御詫び申上げる。

御承知の通り、年々僅かな予算で運営している中で会報発刊は、予算の半分程を要し他の事業への影響が余りに大き過ぎる。又、多々にして自己満足的になるこの種の印刷物に強い疑問を感じ、編集委員を委嘱して諸々検討を重ねているうちに三ヶ年が過ぎてしまった。

本年度から両副会長・事務局長をチーフに「企画・渉外・広報」の三部を組織し各事業の充実を計ったところ、早々にして今般広報担当者によって第八号の発刊が実現した。心から御慰労と御礼を申上げる。

扨て、来年は、本会が誕生して二十年目に当り目出度く成人式を迎えることになる。戦後の混迷からようやく立直った昭和三十七年、神社界の将来を憂いて諸先輩によって青年神主の自己研鑽の場として本会が発足した。

以来、自己研鑽はもちろん神職弟子の育成・福祉施設の協賛・敬神教化活動等が歴代会長を中心に会員諸氏の協力により年々実践されて来た。五十二年には、従来神青協に対して代行的立場にあった本会も正式に加入し、対外活動の推進もなされた。併せて神社庁よりも指定団体の承認を受け絶大な協賛をいただいている。謹しんで諸先輩の御功労に敬報と感謝を申上げる次第である。

これら輝しい実績を経て満二十年を迎えるに、改めて本会の成すべき役割と将来を考えなければと思う。

昨今の社会情況は、我々神社界にとって好転している面もあるが、厳しさが増している面の方が多いように思う。先人が永い時間と労苦を要して言あげずとも神と共に生きる敬神崇祖の国体を築き上げてこられた。しかし、その日本の心（神道精神）が今日希薄化しつつあることは、将来の神社界にとって極めて重大事である。

我々は、絶対に先人が築いた偉大な遺産（預金）を減らすようなことがあってはならない。況や使いはたすことはならない。

今こそ神々の恵と先人の広大な御心に感謝し、我々の今後の活動も先人の遺産を継承し将来につながるもとでなければならないと思う。昨年より始められた各支部懇談会は、毎回多数の参加者を得て、熱気あふれる討議がされている。今後これらの場に於て、会員諸氏と多いに協議し、意義ある成人式を迎えたい。

最後に会員各位の奉仕神社の御隆昌と同志の御活躍を祈念申上げる。

創業70余年の御信用
みくじ
自動・電動みくじ機
製作直売
カタログ無料贈呈
(有) 女子道社
〒745－03　山口県都濃郡鹿野町
TEL　083468－2　0　0　1

京のおまもり
京都奉製株式会社
京都市上京区今小路通御前通西入上ル
☎075-463-5500

青年神職に望むこと

栃木県氏子青年連合会会長　早乙女　一男

むすび会々報八号発刊おめでとうございます。日頃はむすび会の皆様方には、氏青活動に多大なるご理解のもとに、御援助・御協力を賜り厚く御礼申し上げます。栃木県連もおかげをもちまして先日藤原町において実施されました、第十九回全国定期大会も、無事盛会裡に終了することが出来、大変うれしく思っておる次第です。これもひとえにむすび会の方々の御協力のおかげと、心から御礼申し上げます。我々氏青とむすび会とは、二ツの噛み合う歯車の関係ではないかと思います。どちらかの回転がにぶくとも、一方に大きな負担がかかると思うのです。ある神社関係の発刊紙である宮司さんが体験記として寄稿された中で「氏子青年会を結成するか否かは私の体験から言いますと、一ツにかかって各神社の宮司さんの考え方次第であると思います。……しかも今後の神社運営は青少年対策なしで成り立たないと考え、まづもって氏子青年会の結成に踏み切った訳です。」と言う言葉を思い出し、抜書して見ました。今の私達にとって神々との接する場は、言うまでもなく神社であります。今の若者が正月の初詣・お宮参り・その他各祭り度に集る老若男女を見ましても、今もなお歴史的にも、現代的にも今だにその価値を失なっていないのは事実であります。現代青年にとって神道・神社とは何なのか……。我々昭和二ケタ生れの氏子青年の神社に対する考え方は、我々氏青の仲間にも、お互い共通するものはあっても、考え方、とらえ方においては千差万別であると思います。神職の方々は神道に対しての教育を受けて来ており、又神道をまっとうするがゆえにも一人一人の考え方も神に関する限り横に一直線であると思うのです。しかし我々の様に考え方の違う氏子青年が、一つにまとまった青年神職の方々と、日頃各活動において接触を重ねる度に多少のギャップが生じていることは見逃せない事実と思うのです。それは現に戦後の世代での我々の氏子活動は、現代的ではあるけれども、それなりの価値は十分あると思う反面、逆に専門的な立場から体系的神道を教え指導していただく時点に、我々との多少のみぞが生ずることは、さけられないと思うのです。それがゆえにいかに神社人としてむすび会の方々が我々青年とどう接触し、導き如何にして神社活動の場につながりを持たせることが出来るか、その広がりと高まりをどう受け止め、どう取り組んでいただけるかがカギと思うのです。我々青年は特性とも言うべき仲間づくりは得意だし、行動力もあると思います。皆さんの適切な呼びかけが私達の関心事と共通し、ひらめくものがあれば、我々は必ず応える力を持っております。お互いに話し合い、考え、労力面でも自分の得意な特技をもって奉仕するのです。良く私達仲間が「氏子青年会を作ることは易しいが、しかし出来たあとが問題だ。何をやって良いのか分らないんだ。」と言う言葉を耳にします。特殊な団体であるだけに難しいのです。そんな時にうまく神道を理解させ、サブ的立場でリードしていただけたらと願うものです。我々は創造性と開拓気性が旺盛ですから、必ず想像以上のものを持ち寄り作り上げると思うのです。新らしい氏青活動は、その時代に即応したものでなければならないと思うのです。その様な意味におきましてもお互い敬神活動の意志疎通を深めて行かなければならないと思います。今回会報の貴重な紙面をお借りし一言述べさせて戴きましたことをお礼申し上げ、又むすび会の益々の御発展をお祈りし、今後とも氏青活動を御指導願えれば幸と存じます。

御装束、祭典用具
結婚式場設備の御用は

宮内庁
栃木県神社庁
御用達　森　装束店

〒160　東京都新宿区西新宿4丁目7—21
電話　東京（03）（376）4631番

四年間をふりかえって

登拝

むすび会研修会について

昭和五十三年の春に阿部会長が新任の挨拶で述べた様に、我々は神社という枠の中で物事を考えがちであるが、　神職たる以前に社会の一員であるという点から、もっと広く各界との交流を深めて自己研鑽の拠所とすべきではないかという考えをもとに、次の様な意見が出されました。

一、他団体との交歓会。

一、各社の祭典奉仕。

一、各地諸行事の見学。等々

そこで新らたな行事として、日光二荒山神社の仲秋登拝祭奉仕と合わせて研修会を開催することになりました。

仲秋登拝祭の前日に集合して、中禅寺湖で禊を行い、喜田川宮司より「山岳信仰」についての講義を拝聴し、当日は中宮祠より御神像を奉負して男体山に登拝し、奥宮にて祭典を奉仕しました。

五十四年には日光連山各社の例祭奉仕ということで前白根山、奥白根山へ登拝し意義ある御奉仕であったと思います。

研修会はむすび会の原点を再認識するために吉田元会長より発足当時のお話しを伺いました。

そして五十五年には太郎山登拝と阿久津宮司の「神道墓地」についての講義、五十六年は大真名子、小真名子山の例祭奉仕と小林宮司より「神社神道の未来」についての講話と討論会が行われました。

周知の様に男体山を始め日光連山は御神体山であり、大神様の鎮まります御山として広く朝野の崇敬を集めてまいりました。人々は大神様の御加護を戴くため山中に分け入り難行苦行を重ねたのであります。したがってこの日光連山登拝は山に入ること、それすなわち山の祭りなのであります。自然にとけこみ、自然に身を任せてこそ自然と人との和合が果たせるのでありますが、参加された皆様はどのように理解されたでありましょうか。

来年も計画されるであろう女峰山、赤薙山で日光八連峰の登拝は一区切がつくでありましょう。今後の研修会を考える上で参考になればと思い発足当初のことなど振り返ってみましたが、我々青年神職が外へ目を向けようとする姿勢は大切な事だと考えます。

また、これから個人的努力に求める事は困難であり、会員全体の問題として取り組み、具体化することがむすび会本来の目的の一つであると思います。

現実には内外共にいろいろな問題が生じて来ると思いますが、会員の目的意識の向上をはかりつつ大きな目標のもとにそれらを克服して、闊達にして活動力ある研修会に、そしてむすび会にしていただきたいと思います。

（池田　清）

北方領土

全国神道青年協議会（以下全神協）の創立三十周年記念の全国大会が北国・北海道根室市に於いて行なわれました。

此の大会は全神協が戦后の荒廃した祖国復興の大願を期し、日本国民の精神生活の根幹を成す道義啓蒙の為、斯道邁進の先人先輩の下に十年二十年と微力ながら全国の同志を結集しつつ、御国の為神道界の隆盛を願い歩んできた区切りの三十年を総括するものとするものとすべき実施されたのであります。

此の道東の地、根室にて行なわれた意図は申すまでもなく、沖縄返還がやっとされましたが、しかしまだ不法占據されている我が国土北方領土の一日も早い返還を乞願い、又国民としての国土意識・祖国愛高揚の為の運動であります。

此の大会の精華を記念すべき事業実行委員長に関東地区より千葉神青の宮間氏が選ばれ、又関東地区の統一行動としてキャラバン隊を編成して、納沙布岬まで「北方領土返還キャンペーン」活動をすることになりました。

そこで、我が県都の二荒山神社に関東地区各県のキャラバン隊が結集して神前に額突き、結団式を挙行致し、栃木県神社庁の各先生始め先輩各位の激励の下に街頭活動を行い、一路根室に向け出発致しました。我が栃木県は阿部・池田・横山・重田・柳田にそして小生（柳田耕）の六名（佐野黒川両氏が仙台まで送って下った）のメンバーで、宮崎県神青協の日本縦断キャラバン隊の先導により関東地区連なりて、郡山市・福島市・仙台市にては地元神青とともに街頭広報活動を致しました。仙台よりはカーフェリーにて苫小牧港経て北海道へと入りました。苫小牧・日高山脈を越え、帯広池田、そして釧路・道東根室への道のりは我々内地の者にとって、こんなに小さい国でありながら、大変長い道のりに感じた次第でありました。北海道の大地は幾重にも線が重なり、ひろびろとした田畑丘陵に秋の空の気配が感じられました。

さて、根室に於ける大会は全国の神青同志が市民会館の会場をあふれんばかり集り、ソ連に不法占領されている歯舞諸島・色丹・国後・択捉の島から成る北方領土の早期返還を実施すべく世論を喚起し、返還される日まで我が国土を守る民族の気概と使命を確認したのであります。

特に根室市長さんの切実なお話を聞き、ソ連の一方的な侵略（実質占據）の姿に憤りを感じたと同時に、根室市民、道東の人々の成業の破壊、又、常日頃ソ連から受ける脅威、そして生れ故郷の島々に向けての郷愁等苦悩と悲願の現実を知らされたわけです。根室市長さんの言葉の中に我々が深く省みる必要があると考えさせられました。根室市民がひしひしと感じている北方領土、そして国土防衛の非力な現状の中で、本土を始め全国の各団体の返還要求運動の中に必ず聞く「私達は根室市民の皆様の悲願に対し、心から御支援並びに御協力をします。」との言葉に、同胞であるべき日本人が第三者的な他人のような、感覚で北方領土に対する受けとり方をし、日本人一人一人の領土・全日本人の領土であるはずの北方領土に対する熱意の希薄なことに大変くやしいと思うことです。

誠に反省すべき民族意識と感じた次第です。

そして、記念式典の後、納沙布岬に鎮座する納沙布神社に参拝致し、境内に全国各県からの石が塗りこめられた記念碑の除降式が厳粛の内に執い行なわれました。

納沙布岬からの青海原の中、真近かに手が届くような貝殻島そして水晶島・秋勇留島・勇留島・志発島・多楽島・カブト島の歯舞諸島、左に遙か遠く国後島として択捉の島々は我が民族の踏むことの出来ない国土なのであります。

北方領土の総面積は四、九九六平方キロメートルにも及び、択捉島・国後島は離島中、我が国第一・第二の面積を存する最も大きな島々であります。

最後にこの北方領土を考えるとき、我が日本人の国土意識の欠如の立て直しをいかにすべきかを問わなければならない時期と思うのであります。

韓国に占據されている竹島、中国領を主張する尖閣諸島等隣接する国々とはいずれも問題をかかえている現状です。我が日本国の国土を防衛することの怠慢の姿をもっと強く世論に問わなければならないところであります。

付け加えますが高校時代使用した帝国書院編集の高等地図（昭和四十一年四月十一日文部省検査済）のものには尖閣諸島の記載もなければ、北方領土はカタカナ（外国領土か？）にて記載されています。日本の国土地勢の貢には北方領土も、竹島も沖縄諸島いわんや尖閣諸島も記載されていない事実に改めて考えさせられた次第であります。しかし昭和五十三年三月三十一日の検定済の同書院のものには改められています。やはり世論の高まりが成すものと再び努力のこと強く感じ入りました。

（柳田耕太）

パラオ諸島慰霊団報告

昭和五十五年三月二日～六日

この年パラオをめぐる報道がとくに多かった事を記憶している。その中でフィリピンに続き、しかも今回は本会主催にて、会員以外の方々と共に郷土の歩兵五十九連隊最後の地パラオを訪れ、英霊の御前に感謝の誠を捧げられ、民間ベースとい

えばそれまでになるが、永くパラオの酋長様始め各島々の皆様とおつきあい出来る事となったことは、神々よりの恩頼と、英霊達の引き合せによることとの感を今更乍ら深く抱く次第であります。

想えば、前会長黒川正邦氏の長年にわたる構想が、様々なる人の輪を通し、会員個々の氏子、崇敬者の賛同を得るところとなり、会員一同教育勅語の再暗唱という志気の盛り上り、献供物の依頼もあってすみやかに実施の運びとなったわけであります。

現在のパラオは、米国委任統治領よりベラウ共和国として独立を成しましたが、当時は独立か、米国の支配下に入るのか選択の時であり、二派に分かれての選挙をひかえての時でもありました。

我々の行動の記録等は、パラオ諸島慰霊団報告書にある通りでありますので省略させて頂きますが、パラオは現在ベラウ共和国として独立をはしたものの、米国の援助なしでは到底やっていけないことは明らかであり、非核憲法を揚げての舟出も、将来の行方を困難にしていることは、報道その他でも御承知の事と存じます。

今年度の神青協総会での埼玉県小林会長のパラオ訪問についての発言に端を発する、南洋神社再建問題が、神青協役員研修会で特別事項として取り上げられたと伺い、我々としても出来うる限り研究致し度考えて居ります。

パラオの人達は、戦前よりの日本支配により、全く日本の教育の下に、パラオ語と日本語が生活の中で一つにとけ合い、米作りを覚え、自立の道を歩んでいたわけですが、戦争というものによりすべてを失い、米国の支配下では、戦略上の問題から、土地を提供するかわりに、食糧その他必需品はすべて与えられる生活となったわけですが、日本の教育を受けて育った人々は、口々に米国が来てからは社会秩序の乱れ、勤労意欲の低下を嘆いて居ります。パラオ慰霊団に参加したすべての人が感じたのは、この地に日本の戦前の良いところが今も残っている所であったということです。

そして何よりも、あたたかく、頭の下る思いであったのは、戦争を共に戦い日本の為に尊い生命失った身内をもちながら、墓守りは引き受けましたとの言葉を聞いた事です。

「墓守りの歌」という日本語の歌があります、その歌詞の中には、〝遠い故郷から、はるばるとお墓参りに、ありがとう、緑のお墓のお守りは、ペ島におまかせよ、いつまでも〟とあり、日本人もパラオ人も同胞であるという事なのです。

慰霊団の人達で、会員以外の人よりの呼びかけで、一周年を迎えるにあたり、祈念をこめて集まりをと、一年たった祭典日の三月三日に近況報告を含め集まりを持ち、毎年会合を開く事になった事も、皆パラオの事は常に忘れえぬ個々の課題とした感さえあります。

戦後の我国の経済発展は目を見はるものがあります。が、戦争の傷はまだ残っています。パラオ慰霊の次にと、中国本土にての慰霊祭の計画は、その時期にては非ずという、遠まわしの言い方でしたが、お断りという形になりました。この事は相手国の国情というものを十分考慮にいれるという事を教わったようで、我国の豊かさに比べて、まだまだ格差は思うように埋っていないということだと思います。パラオにしてもそうでありますが、日本支配というもののあり方の違い、貢献度の違いがあったところに、他の国々とは異なるところであると思われます。

しかし、慰霊団に参加した人たちの意見はパラオに対しての問題は、当然国が負うべきところではあるが、現在の状態では、五十九連隊の生存者遺族を中心とする、民間ベースでの心の通うささやかなものでよい段階ではないかとするのが一致した意見であります。

南洋神社再建の問題が出た以上、パラオを知る我々として、本当のパラオの姿を広く知ってもらい、真の心の通った援助というものを確立する為に、南洋神社再建問題を含め、今後共取り組んでいかねばならぬと思います。

パラオ諸島慰霊団日誌

昭56・3・2　成田発　サイパン・グァム経由にて、パラオアイライ空港着。大酋長　オキヤマ・トヨミさんの出迎えを受け、歩兵59連隊慰霊碑参拝

夕食後、パラオダンスの歓迎をうける。

3・3　ボートにてペリリュー島へ、慰霊祭執行、会長斎主以下、祭員二名令人三名奉仕す。ペ島村長以下島民の方々の参列をいただく。慰霊祭奉仕後、島内戦跡を視察、

六名はセスナ機にて、アンガウル島慰霊に出発、夕食後大酋長のお招きに預り、ペリリュークラブにての歓迎パーティーに出席。

3・4　バスにて、コロール・パラオ本島の戦跡、博物館等視察。

3・5　アイライ空港よりヤップ経由グァムへ。バスにてグァム島慰霊碑参拝。

3・6　グァムよりサイパン経由にて成田へ

尚、この慰霊祭に対しては、神社庁の絶大なる御支援をはじめ、各神社の皆様、県パラオ会の御助言等々、又案内役としてお世話下さった小山市在住増日進氏に末筆乍ら、衷心より重ねて御礼申し上げる次第であります。

（重田　正美）

海水浴

県内青年神職の集りである「むすび会」は会員相互の交流を深めることは勿論であります。それと共に家族や地域の人達との融和を計る目的で、せめて一年の内の一日、子供と一緒に遊び家族同士、地域の人達の広い交流の場として手軽るに参加できる茨城県磯浜海岸への「日帰り海水浴」が企画された。

昨年は、バス一台約四〇名程を予定したところ、七十数名の参加があり急遽マイクロバスを出さなければならないと言う大盛況であった。本年は諸事情により昨年より参加者が減ったものの前年同様に実施した。

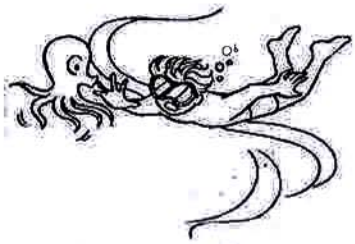
子供達からは、珍らしく父親と一緒に遊び、山国から憧れの海へ行き、更に車中、砂浜での神社庁金子先生の指導の楽しいゲームにより大好評である。

何かとむずかしい会議や研修会の神社界の行事の中で、このような全くの家族ぐるみのレクレーションも必要と思う。

レクレーションの中にも磯前神社参拝を加え、鳥居を通る時に一礼し、手水を使い、正式参拝を行う。神職の子弟には改まって教化もないかもしれないが、神職以外の子供達へも自然と教える。子供は、楽しかった海水浴とゝもにチャンと神社でどのようにお詣りするのかも覚えてくれる。生きた教化となっているようだ。

予算の都合もあるが、今の海は汚れているので場所も検討して、楽しい恒例行事として続けて行き度い。

（奥田　興次）



神・仏
交通安全祈願ステッカー
元祖専門店
3M社Ⓝ直系特約店
3M印、反射ステッカー・蛍光材ステッカー・蛍光反射兼用式ステッカー・発光式ステッカー・七色に光り輝くステッカー・国産材ステッカー・シール・ラベル等
其の他…奉賛会門標プレート・特殊印刷加工販売
K.K.小島マーク
〒188 東京都田無市西原町三丁目三―二八
本社・営業（〇四二四）六一―六五七一（代表）
第二営業所（〇四二四）六一―六五三一・六五一・五六二四

各種授与品奉製
株式会社 三愛工芸
〒310 水戸市衿塚3－4－2
電話　水戸(0292)51－2051(代)

お伊勢まいり道中記

黒川正邦

〈出発〉

お伊勢さんまで歩いて行こうと思いたったのは、先祖の残した道中日記との出合いからである。父祖代々の神主は吉田家の裁許状をもらうため京都へ上ったものである。その折には必ず伊勢へ詣でたらしく何人かの道中日記が残っている。それを見ると下野国（栃木）から伊勢までおおよそ十五日～二十日くらいの日程であるが途中名所などを見学しながらの者と真直ぐ伊勢へ行く者とで四～五日ちがうようである。それらの道中日記にはそれぞれ父祖伝来のお社をお守りするために京都まで行くのだ、お伊勢まいりをするのだ、という決意のほどが記されている。それを見て自分も奮起せざるを得なくなったのである。

出発の日、五月十日は父の三回目の命日である。三年祭は過日済せてあるので墓前に参拝、心配そうな家族の見送りに、後髪を引かれる思いもあったが、それも旅に出た気やすさからか少くなり、五六〇キロの徒歩道中は快調なペースではじまった。

しかしである。初日の宿である古河にたどり着く頃には、すっかりくたびれ、おまけに足はもうまめが出来る始末である。先が思いやられる出発ではあった。

〈まめ〉

今回の伊勢道中の為に特にトレーニングをしたわけでもない。学生時代の四年間合気道部に籍を置き多少体力には自信はあったが、もう卒業以来十数年がたつ。境内掃除ぐらいの体の動かし方ではかなり軟弱化している。それにビールの飲みすぎで腹もだいぶ出て来た。

そんなわけで、ひざの痛みと、足のまめには、大変と悩まされた。特に雨の次の日は足の裏に大きなまめの水泡が出来た。一日中雨にぬれたズックの中で、足がふやけてまめの中に又新しいまめが出来る。足の平に出来たまめは体重で水泡が、つま先に寄せられ、指の間からつま先足の甲の方まではみ出る始末である。小指などは倍くらいの太さになり、いつのまにか爪もなくなっていた。

信号の多い市街地は尚一層苦痛であった。二～三百メートル歩くとまめの痛みもマヒするのだが、赤の信号で立止り、再びふみ出す第一歩が何んとも痛いのである。しかし街中は人目もあるので痛そうな歩き方も出来ない。歯をくいしばりながらも背筋を伸ばして元気そうに歩かなければならない。だが人家が無くなると、それは『杖にすがって歩く』という表現がピッタリのあわれな姿となる。まるで落武者か敗残兵の歩き方である。

道中一度も手ばなすことのできなかったこの杖は、男体山登拝の折、日光二荒山神社でいただいた金剛杖である。転ばぬ先のつえとは良く言ったもので、この杖のお陰でどうやら伊勢までたどり着くことができたと言っても決して過言ではない。出発前は目の高さ近くあった長さが、伊勢に着くとあごのあたりまで短くなっていた。約十五センチもすりへっていたのである。雨の日には、やはり水を吸ってふやけるのか石突の部分がめくりあがり、茶道具の茶筅のようになった。今もこの杖は記念の品として大切に保存している。

〈日記〉

そんなわけで道中の前半は何ともさえない歩き方ではあった。その痛さと疲れのピークであった頃の日記を抜粋してみる。

五月十五日　六日目（金）　晴

二宮を八時三十分出発、もう少し早く出発した

いのだが朝食が八時で一番早いとのこと。午前中に距離をかせいでおかないといけないと思い、ペースを少し速くする。

十一時半小田原二宮神社着。朝山・大貫両氏と面談、朱印を受く。正午発、いよいよ箱根へとかかる。湯本より旧道を登る。畑宿泊りと決めていたので時間は充分ある。

四時過頃畑宿着、民宿が四軒あったがどこでも一人旅でもあるし予約もないので泊めぬと言う。しかたなく元箱根まで行くことに決めた。あと登りで五キロ、約二時間ほどである。腹がたったがどうしようもない。旧道の石畳の道が近道と標示されていたので、その道を行くと凸凹道で何とも足が痛くてしかたがない。又新しいマメが出来た。しかたなくアスファルトの道を登る。

六時過芦ノ湖のある元箱根着、松坂屋泊。ここでも一人では泊めぬと言ったが、ねばってようやく泊めてもらうことにした。

しかし宿泊料一万円は普通の倍近い、観光地はコリゴリだ。登り道だったためかなりこたえた。

約三〇キロ

つかれはて、宿を惜むと頼めども
　つれなきこたえ　足なお重し

うらみても　せむかたなしとふみ出せば
　観光バスの　そこのけの笛

五月十六日　七日目　（土）　晴

八時朝食をすませすぐ出発、渋川宮司と面談、朱印を受く、杉木立を渡る風すがすがしく快調なペースで峠まで四十五分ぐらい。いよいよ三島へとはりきる。だが、グラダラ坂で同じようなくり返し。日光のいろは坂みたいで多少あきれる。そこで旧道の石畳を行くと急坂でまめとひざが痛い、しかたなく元の国道を行く。一時三島大社着、鈴木、勝又両氏と面談、朱印を受く。富士の桜井君の所まで、あと二十キロ位という。そこで今日の泊りは富士市と決め歩き出す。しかし下り坂が長かったので、ひざがガクガクして思うように進まない。沼津手前で親切な親父さんが、頼朝、義経対面の旧跡を見てゆけと言うので新道を行く。沼津以西はなかなか進まない。午後六時近くになってようやく『富士市』という看板を見るホッとしたとたんに疲れがドッと出る。

東田子浦駅前で桜井君にＴＥＬ。迎えの車をくれる。約三十五キロ

手をとりて　迎えし友とくむ酒に
　旅のつかれも　しばし忘らる

〈友の情〉

東田子浦より桜井君のお宮、富知六所浅間神社は約六キロくらい西、伊勢寄りになる。つまり約六キロ歩かずにすんだわけである。内心得をしたと思っていた。しかしその考えは甘かったのである。次の朝、昨日の東田子浦駅前まで車でもどしてくれたのである。結局同じ道を三回通ることになったわけである。おまけに歩き出すと雨まで降って来た。

雨の中を歩きながら考えた。何と甘ったれた考えだったろう。出発の前から多少の苦労や苦痛は覚悟していたはずだったのに。

人は昔より楽の方へ流れやすいと言うか。まさに自分の心の弱さを見たような気がした。反省せずにはいられなかった。それにしても友の誠の心が何ともうれしかった。

昔から旅は道づれ世は情と云うが、徒歩の一人旅では今どき道づれなど出来るはずがない。しかしながら今回の旅ではたくさん世の情のありがたさを知ることが出来た。これは大きな収穫であった。例えば一度会ったぐらいの面識しかない神主さんから足のまめにつける薬をいただいたり、見ず知らずの農夫が田の草とりの手を止めて冷たい牛乳をくれたり、小さな町で日が暮れて、旅館も民宿も見つからない時に親切に世話をしてくれたお巡りさんとか、人の心のあたたかさにしみじみと忘れ難いものを感じられた。

〈文明〉

伊勢までの道は日光街道・東海道・そして名古屋より伊勢道と旧道の残っている所は出来るだけ旧道を通ったが、大部分は国道を歩かなければならなかった。街中は歩道と車道が区別され、ガードレールもあり安心して歩くことが出来たが人家がなくなると歩道など全くないしガードレールもない。かろうじて白線が引いてありその外側を歩くわけだが、道は中央が高くなっており右足と左足との高さが極端にちがったりして人が歩くようには作られていない。車の為の道路であって歩行者用には全くなっていない。それもそうだろう今時歩いて旅をする人なぞほとんどいないだろうから。

そんなわけで歩いているすぐ側をダンプやらタンクローリーやら貨物トラックやらが排気ガスをまき散し次々と追い越してゆくのでたちまちのどが痛くなり『浅田あめ』は道中常に口に入れてお

かなければならなかった。
しかし、昔の古い家並が残る宿場や松並木が残っている旧道を歩く時は心がやすらいだものである。並木をわたる風は心地よく、往時の旅人も休んだであろう松の根片の石は苔むして今も一時の疲れをいやす。
文明が進み今は伊勢まで栃木からたったの六時間で行ける。しかし十七日間かかって神宮へ着いた時のあの感激は生涯忘れられない。帰路の新幹線の中で、九時間かかって歩いた浜松・掛川間を時計で計ってみた。たったの八分三十秒である。何んとも味気ない気がした。旅には苦労や苦難は付きものであった。
そしてそれを忘れさせるだけの道中の人の情や、風情や、目的地に着いたという感激があったはずである。しかし現今は文明の発達によりそれらの苦労や苦難が少なくなったかわり感激もまた少なくなったような気がしてならない。

お伊勢さん
ここは心のふるさとか
そぞろまいれば旅心
うたたわらべにかえるかな

吉川英治の歌にもある「心のふるさと」という言葉はだれが使いだしたのかは知らない。しかし今回の参宮でそれをしみじみと感じることが出来た。二千年の時の流れを越えて、祖先たちが感じたことを私も感じることが出来たのである。今回で九度目の参宮であったが、いままでとは何かちがった感慨があった。
それは五十鈴川の水の清さにも、冷たさにも、千古の杉の緑にも、はき清められた玉砂利にも、すがしくわたる風にも、お伊勢さんこそまさしく心のふるさとであると感じられたのである。
伊勢に着く前日の道々歌を歌いながら歩いた。あの三波春夫の歌うところの

渡会の岸の柳に
宮川の橋の桜に
群れ集う春の旅びと
ほほえみもあこがれもここにあり
ああ日本のふるさと
心のふるさと
伊勢の大神宮

という「日本の祈り」である。
この歌を歌いながら歩くとどうしたわけか涙がとめどなく流れ出て来てしかたがなかった。明日はいよいよ伊勢だぞ、とうとう来たぞ、という気持もあるであろうがまさしく日本人の血の中に流れているものがなせる業であった。一生に一度はお伊勢まいりをしたいものだという日本人の心は今も昔も少しも変りはしないのである。日本人として生まれて来たことを有難く思わずにはいられなかった。
最後にあたたかくお迎え下さった神宮の皆様のお陰でお伊勢さんが更に身近に感じられましたことを深くお礼申し上げてこの道中記を終ります。

（栃本県壬生町雄琴神社宮司
神道青年全国協議会副会長）

各種御神矢
創業120年
本物矢竹・本羽根
御神符・板札・御守札・交通札（マリ付・金幣型・錦織・プラスチック・メタル・キーホルダー他）
熊手・錦守袋・掛軸・一刀彫・升・杓子・箸・福笹・吉兆、他
湊御神符奉製所
株式会社 湊
三重県伊勢市宇治中之切町（神宮会館前）
電話 伊勢局（0596）22—2442代〒516

御札・神符・御守・木札・破魔矢
交通安全札・プラスチック守・ビニール守
掛軸・守袋・ステッカー・桝
謹製
丸井紙店
代表取締役 有泉次郎
山梨県西八代郡市川大門町763
電話 市川大門（0552）72－0136
振替 甲府 6—2275
振込 山梨中央銀行市川支店当座121

青年神職全国協議会関東ブロック総会
記念講演「忘れられた日本人の糧」

国学院大学名誉教授　樋口清之　先生

ただいま御紹介いただきました樋口です。

今日は「忘れられた日本人の糧」という題で講演します。私の専門は考古学です。今から十年ほど前から日本人の精神的優秀性というものを再発見したいと研究しています。

私は実証的な学問をやってきましたので、実証的な立場から正しく書いてみたいと考えまして書き続けてきました。中でも『梅干しと日本刀』などというのが売れましたが、その本で梅干しが何故いいかと言うことをいいました。梅の酸は青酸でして、それを土用に天日に干しますと、干した瞬間に太陽光線をうけ、その青酸を発酵の過程に於て、クエン酸に変えるのです。クエン酸とは全身の生活力不足作用をもった酸でして、しかもアルカリ酸、食べた瞬間に全身をアルカリ化しますので、梅干しが健康に良い理由はそこにあるんです。こういうことを一体だれが発明したのだろうか。だいたい梅を潰けて天日に干して青酸をクエン酸に変えるということを。私は結果を言っているだけですよ。けれどもこれを発明した人がいるんです。しかも日本で梅干しが出てくるのは平安初期からです。そのクエン酸サイクルを分析せずしても十年前に日本人は知っていた。ヨーロッパでクエン酸という言葉が出来たのは十九世紀末ですよ。日本では十世紀に知っているんですよ。

これをなぜ自然科学理論にしないかというと、それは「言挙げ」しない思想があるからでして、理屈を分析して科学の公式や方程式にしない性格があるんでして、日本人はただ言葉を言わないだけなんです。これが日本人の科学思想なんですよ。それが心の中にずっと広がっておりますから、言葉で表現されなくても近代以上の知恵が古い時代から日本人の生活の中に流れていることを私達は忘れていたということですね。

日本人の生活には、無駄、娯楽がある。文化の高さは無駄があるか否かです。開放感や無駄が必要なんだ。無駄があるから生きがいがある。日本文化は、それを実に巧妙に演出していると思う。日本料理には、食べないものを付けることによって、私ら情緒を演出してますね。それが日本の文化というものなんです。余情であり季節感があり自然とのふれあいがあって、私らはじめて人間としての喜びを感じるんでして、それを私らは錯覚をおこし、食品を全て薬品だと思っている。薬品は治療薬ですよ。食品は栄養があって、しかも時には無駄があって食品というんですよ。日本人の身体は、腸管が長くできていますよ。その腸管の中で、さらに消化を捉進するために消化しないものを食べるんですよ。たとえば沢庵がそうですよ。絶対消化しないものなんですよ。また、コンニャクのようなものがあるでしょう。それにはマンナンが含まれていますが完全不消化繊維ですよ。でも食べる事が必要なんだ。腸管が長いから、腸の蠕動運動を助けるためには、不消化繊維のものを入れなければ、完全消化運動ができない。だから、それを入れて腸管中で自化発酵する。これがビタミンKなどを生むもとですから、発酵によって新しいビタミンを生んでいく。ですから不消化のもの、無駄なものを食べることが必要なんだ。これはすばらしい知恵ですね。

そういう日本人の優秀性ということを、私たちはもう一度見直す日が来ると思います。

しかし日本人は面白い民族ですね。ある物が良いと思うと、すぐ対応します。ここが偉さです。「まねる」ということですね。「学ぶ」の語源は「まねる」ですよ。真似の出来る人は学べる人なんですよ。日本人を猿真似だと言うが、猿真似でも真似られないより、真似られるほうがずっといいんだ。その上、日本人は真似てそれを日本的に再生産する。そこに日本文化の良さがあるんですから、皆さんも真似ることに心がけて、自分のものとして真似ることを考えていただきましたら、日

本はもっと高まると思うんですよ。真似ることは、いけないとだけ言っている。しかし真似ないものは滅びる。たとえばアフリカ大陸・インドがそうでしょう。伝統を保護しすぎた為植民地になったんでしょう。真似て自分のものとすればいいんだ。自分を肥すために真似る。それを私らはやってきた。真似ながらも日本的再生産をしたものはたくさんありますね。

その一つに医学があります。日本人の医学は西洋医学と基本が違いますね。日本人の科学は、だいたい自然と人生は一体であるという考え方です。これが日本人の信仰にもなります。自然と人生は一つ、だから自然は神、ですから神に神習うことが日本人の生きざまでしょう。これが日本人の自然哲学です。神道も自然哲学ですよ。これが日本人のものの考え方の基本です。だから自然の原理に叛いたりすると人生は滅びる。自然を征服するなんていうことはありえない。人類が自然を征服した例は、今まで一つもありませんね。征服できるはずはない。日本では、そのようなことは考えもしなかった。医学においても、そうです。自然との調和が健康の原理であると考えた。西洋医学は、自然を無視することからはじまっている。第一循環は血液。第二循環は内分秘とホルモンですね。この二つが西洋医学では全身を循環する精気なんですよ。

日本にはもう一つある。第三循環を考えた。これを「気」といいます。見せろといわれても見せられない。現像ですから。生きていく元を「精気」その元を「元気」というんです。今、ようやく分析されまして、気とは約二千ボルトの静電気なんです。私たちの身体には、静電気といわれるような生きていく作用があるんですよ。それが全身を循環しているのを経絡腺といい、その経絡腺が自律神経と交わる点を経絡点といいます。それが急所であって、お灸などの灸点というところです。それを刺激すればバランスが元にかえる。それが日本人の東洋医学の基本なんです。第三循環医学ということを知っていたんです。

明治維新以前はこれをやっていた。これが針・灸の医学でして、しかし織方洪庵の影響で一切の伝統医学を断ち切ったんだから、第三循環なんて認めない。今、もう一度、第三循環医学を考え直してきたんです。従って、胃が悪いと、西洋医学では胃を取ろうとする、心臓が悪いと心臓をなんとかしようとする。こういう対処療法は局所を刺激して、一時的には刺激を受け付けますが、それで根本に治ったことにはならない。根本に治すには全身のバランスを自然のバランスに返せばいいんです。アンバランスを元に返すのが治療というものなんです。回復術なんです。たとえば、胃が悪いというと第七脊髄の左右を押さえるわけです。すると胃を支配する自律神経が復活しますから、胃がよくなる。不断でもここを押えましたらガスが出ますよ。治りますよ。これを繰返せば簡単な胃潰瘍は治っていくんですよ。これを西洋医学では、胃を取るんですから、それは胃がなくなったんだから治ったのでもなんでもないんですよ。東洋医学、まさにそれは経絡腺なんです。そんな目に見えないものを古代人は知っているんですね。そこをちゃんと刺激すればいいんですが、刺激するということはそこへ電流を集中させることで して、だから生命力は自分にあるわけで、外にあるんじゃないんです。

このように、日本人はきわめて自然の中に原理を知っているということ。これが日本の心なんです。これは結局、自然のバランスにかえるだけです。抵抗してはいけない。西洋医学は抵抗しようと考える。日本人は順応しようと考えている。

私たち日本人の本当の良さ、聡明さということを、私たちは忘れてきたと思うんです。その中で最も基本となることは日本の心です。

これをもう一度回服しなければならないと思う。科学的知識は心から出てくるんです。西洋の科学的知識は技術からくる。技術はいつか滅びる。心は滅びない。自分の中にあるものだから。そういう意味で私たちは自然を大事にして自然を畏れ、自然を征服しようとせずに、いかにして人生を自然と対応させようと、調和させようかと考える心これが日本の心というものであって、これが教育も社会生活も或は、健康も、全てこれが出発点だと思いますので、私らが一番大事なことは、忘れられた日本の心、自然と人生との調和、自然を畏れ、自然を尊ぶこと、これは神に通ずる道だということを、もう一度考え直してみたいということが結論でございます。

（文責　阿部康・稲）

昭和五十六年五月二十八日

於栃木県神社庁

《奉仕神社紹介》

女子神職として

八坂神社

祢宜　葭田容子

神職を拝命して六年になりますが、神職になった事情は二つあります。一つは、主人（宮司）が、神職と公務を両立するためと、もう一つは、「長男を神職として育てるためには、母親がその道の勉強を」と、前宮司であった、故葭田真斎大人命に、強く勧められてのことであります。最初は資格だけを取ればと思っておりましたが、神道という奥深い業に、自ら心がひかれてしまったようであります。

昨年の八月、伊勢市の神宮会館で行なわれた、婦人教養講習会を神社庁のお骨折りで受講することができました。とても有意義であったとは言うまでもありませんが、それにもまして、他県の女子神職の方は、常に横の連絡をとり合い、一丸となって勉強会を行ない、活躍しておられる様子、うらやましく思いました。しかし家庭の主婦でもある私が、毎日が家事や社務におわれて、他県支部の女子神職の先輩の方々とは交流もできず残念に思っております。

私の奉仕する八坂神社や蒲生神社の大祭には、夫婦で奉仕しております。もちろん、大前では夫婦という気持ちはまったくなく、宮司と祢宜に徹しておりますが、ある先輩神職の方から「夫婦で奉仕することはあまり感じよくない。」とご注意を受けたことがあります。

また、外祭の依頼電話で「神主さん女の方ですか、男の方にお願いしたいんですが」と、言われると、女子神職の軽視ではないかと、遣り場のない悲しみを味わいます。しかしこういう私にも強い身方がおります。それは奉仕するお宮の総代をはじめ氏子が、応援しはげましてくれることです。そのためにも、神明奉仕を通して、女子神職の価値を少しでも神社に役立てたいと思います。

この未熟な私も執筆を依頼されたことによって、神のみこともちとしての自覚を高めることと、後継者の育成や神社神道の昂揚につとめることと決意を新にした次第であります。

私の奉仕する社

安住神社

祢宜　荒井清勝

安住神社は宇都宮の東方三里に鎮座する所に位置し、高根沢の南端、北は日光・那須の山々を見ることができます。

当神社創立は昌泰二年、西歴八八九年と記されており、御祭神は神功皇后をお祭りしてございます。下野沿革誌によれば、正嘉元年、一二五七年五月にして荒井吉明国家鎮護の為に勧請する所なり。後荒井頼母の寛文元年、一六六一年当神社拝殿を造営して、境内に杉・檜の苗を植樹し、又宝暦四年、一七五四年当社拝殿を再造営し、明治維新前正一位安住大明神と称せられ、明治六年に現在の安住神社と改められた。祭りの中心は十月十七日の神嘗祭、当日は文化財指定の太々神楽が奉納せられる。又七月十七日十八日二日間に亘り天王祭が行なわれ、終日人の波で境内は賑はふ。

現在当社は昭和四十八年より境内整備十ヶ年計画の基に、昭和四十九年に参集殿の建設収容二百五十名を要し、又昭和五十三年度より本殿の屋根銅板葺替え、弊殿の新築・拝殿の改築工事等を建設しており、昭和五十七年に竣工の予定であります。昭和五十一年九月には県内で二社神社本庁より神社振興対策指定神社に薬師寺の八幡宮と共に指定

せられ、又昭和五十二年、本殿が県有形文化財に指定せられたのであります。当社は高根沢の総鎮守として数多くの氏子崇敬者の期待に応えるべく努力し邁進する所存であります。

私の奉仕する

八坂神社

宮司　宮田義丸

葛生町の国道293号線沿いの中心街に、天王様と呼ばれ、親しまれ鎮座するのが八坂神社である。十三年程前より例祭（夏祭）には、国道を歩行者天国にし、神輿、山車が巡礼して七月十四・十五日の両夜に賑やかな祭典を催している。

西暦一二〇二年（建仁二年）悪病流行し、疫除、五穀豊穣のため現在の葛生町大字牧の地に一社を勧請し、牛頭天王を祀った。一三三九年（暦応二年）大雨にて洪水となり家屋の流出するものもあった。その時神殿も漂流し神弊・神鏡もまた流出したが、大字葛生の地にとどまった。里人これを拾って現在のところに一社を創立して、神弊、神鏡を祀ったと当社の縁起に伝えられている。

明治五年神号を八坂神社と改称し、明治十年七月二十一日葛生町のほか九宿村の郷社と定められるにいたった。

なお、本殿は一二〇一年の創建といわれ、拝殿は昭和三年に新造営され、神楽殿は昭和十年に建築されたものである。

前述の例祭のほかに、追難祭豆まき式を盛大に催し近郷近在の人々の参拝をいただいているのである。

「安房神社について」

―境内について考えること―

宮司　沼部正昭

小山市の南方、戸数約三百戸の農村地帯にある粟宮地域を見守るような形で当地北部に鎮座して、千数百年に渡りこの地の人々の守護神として崇敬され、また数多くの人々をお救いしてまいった安房神社の創建は、崇神天皇の御代とされており、また、当地の言い伝えによると大昔、御祭神の天太玉命様の一行が現在の思川をおのぼりになって、この地ろえらび、このところにお社をたて御祭神をおまつり申し上げました。そしてその時に船頭をしたのが船太郎といい、（その子孫は、大橋氏と名のり現在もいる）この船の櫂を意味するものが御本殿に奉納されている。

（現在のは明治年間と記されているので多分朽ちるとその大橋氏の子孫が代々奉納しているようである）そしてその時に既に土着ししていた人々の中の一人が粟がゆを作りごちそうしたところ大変おいしかったので大神様等は、大喜こびしておほめになってその者を後に、「粟つくりじじい」として境内にお祭りしたといわれており、現在社殿の北方にお祭りしてある。

以上のように創立由来から当時を考えると、この地がいかに人々が生活するのに最適な場所であったかがしのばれる。うっそうとした森林地帯に川が流れ、池があり、きれいな水が豊かに流れていて、水神宮の池もきれいな水であったろうと想像する。しかし現在は大きく変ろうとしている。社の囲井には住宅が立ち、会社ができ、神社有地以外の周囲の森も少なくなった。田にひく水をポンプで上げるためか水位がさがり、神社のまわりの湧き水もわかなくなってしまった。このような状態が今後も増々大きく広がるであろうと考えられる。何げなく訪れる参拝者の中の声に、「囲りは随分変わりましたが、神社の森は変わらないで懐かしい。とっても心がなごみます。」ということを聞いて、神社の境内地環境のあり方そのものは、ご祭神のご神徳の中の一つとして人間の生活環境を教示するものであろうと考えますので、今後の奉仕の心構えの一つとして私は、でき得る限り当社を自然の姿のまま、き

れいな水、静かな森、澄んだ空気の神社の境内にして行きたいと考えるのであります。

古峯神社

鹿沼市草久古峯ヶ原鎮座

権祢宜　日野郁夫

当神社は、御鎮座一千三百年記念事業として、昭和五十年より、御本殿の御造営を計画し、昨年の十二月に竣工、同月十七日に御遷座祭を斎行致しました。

この度の御造営されました建物は、御本殿（神明造り、十一坪）の他に、祝詞殿（六坪）弊殿（八（二十一坪）拝殿（八十六六坪）などで、付帯工事として、斎館も新しくなりました。また御造営用材として、第六十回伊勢神宮式年遷宮に当り、神宮御用材の一部と日光東照宮の杉並木の御神木を拝領致しております。

本年の五月二十七日には、御本殿御造営竣工奉祝祭を斎行し、神社本庁より弊帛が奉献され、献弊使として、栃木県神社庁長額賀大興氏が奉仕されました。当日は、神社本庁統理徳川宗敬氏を始め、全国各地より、講中、崇敬者、神社関係者、観光業者など、およそ一千名の御参列を頂き、厳粛かつ盛大のうちに祭典が奉仕されました。

〃古峯神社の由緒〃

今から凡そ千三百年前、隼人というお方が、尊の（御祭神・日本武尊）御威徳を慕いつつ、京都よりこの古峯ヶ原の浄地に遷座（創祀）申しあげたのが始めといわれております。その後、古峯ヶ原は、日光を開かれた勝道上人の修行の場となり、上人は古峯の大神の御神威によって、大日光開山の偉業を成しとげられました。この縁起にもとずき、弘仁十一年・嵯峨天皇の御代に、日光四本滝寺・満願寺・滝尾神社等が弘法大師の執奏により、天下泰平の祈願所として定められてからは日光全山二十六院八十坊の増坊達は、勝道上人の修行にあやかって、年々古峯ヶ原（古峯神社を中心）に登山・深山巴の宿で祈願を込め、修行する慣わしとなり、その修行は明治維新に至るまで、千余年の永きに亘って行なわれました。明治初年の太政官布告により、神佛分離が行なわれましたので、佛具一さいを取り除き、純然たる古峯神社となり、現在に至っております。

宮内町・神宮司庁・神社本庁御用達

株式会社　井筒

本　社　京都市下京区油小路通六条北入（〒600）
電話　京都〈075〉341－3341㈹～5番
東京連絡所　振替口座　京都　43735　代表取引銀行　三和銀行京都駅前支店
東京連絡所　東京都新宿区四谷三栄町11－6（〒160）電〈09〉357－4800番
九州連絡所　福岡市博多区東公園2－31（吉塚駅前）（〒812）電〈092〉651－9456番
田川工場　京都市下京区堀川通七条南入（〒600）

営業品目

大麻・錦金欄御守・御守袋・プラスチック製御守・金属製御守・御神矢・熊手等
御一報いただき次第御相談にお伺い致します。

有限会社　サトウ民芸

御社頭授与品奉製

〒310　茨城県水戸市見和三丁目一三九八－二三
電話水戸（〇二九二）五二－四四九七（代表）

社員一同真心こめて奉製につとめます。

岩崎神社

祭神　磐裂命
　　経津主命

宮司　田辺一丸

明治六年九月の『神社取調簿』を見ると、「勧請者長亨年間下総国香取宮ヨリ遷鎮守遷敬ト云云書類天正之頃焼亡夫ヨリ追々修覆棟札而已不詳候」とあり、約五百年前千葉県香取神宮より御分霊を奉遷したものと思われる。当時の祭日は一月七日、十一月八日となっているが、現在（昭和初期の頃からか？）は一月七日・九月十九日に改められている。例祭執行日の決定理由が未詳のため、何日に鎮座したものかは詳かではない。祭礼に当っては、甘酒を造って捧げ、撤下したものを氏子参詣者等で頂くが、昔は当番が氏子中から饌米を募り自分等で醸して捧げたものであるが、最近は市販のものとなってしまった。地元では通称甘酒祭と呼んでいるが、この甘酒祭・兼務社の今市市小倉に鎮座する三所神社にその原型というべきものがあるので付記して置く。

甘酒祭は三月十三日の例祭日には、全氏子中より両親の揃った男子学童までの小供に、当番の用意した弓矢で、鬼の字を馬星にした的を射させるという弓取神事と、甘酒・高盛などを神前に供え撤下したものを頂く強飯式のようなものが結びついたものである。射手は御神威を戴き、その鬼を射貫き、首尾よくその年の悪魔を退散させるのである。

この弓取神事と強飯式の結びつきは意外に多く同市手岡の人丸神社にもあり、同地区の長老の話では岩崎神社にも昔はあったとのことである。

神の加護の下、精根傾けて収穫した米で感謝を込めて甘酒を造り、捧げた甘酒を頂いて弓矢を以って悪魔を払いその年の豊作・無病息災を乞願うそんな素朴な信仰を感じる。

近年、祭もいまひとつ賑いが衰えてきたが、今後この様な信仰を守っていくことは勿論、如何に時代に合わせていくかが問題である。

むすび会
上都賀支部懇談会

昭和五十六年九月二十八日・二十九日にかけて第二回目のむすび会支部懇談会が古峯神社に、於いて開催されました。この支部懇談会は第一回目は真岡市の大前神社に於いて催され、会員相互が県内のことをよく理解できるようにと、各支部を会場に毎年開こうという企画のもとに始まったものです。

今回は、上都賀支部が当番ということで古峯神社を会場に、十数名の参加があり、早朝の日供祭、一番祈禱に参列したり、古峯神社石原宮司にも特別に出席して頂き体験話やこれからの神社界のことにつき様々の視点から助言を頂き、和やかなう

創業寛永年間
宮内庁御用達
高田装束店
神職装束・時代装束・諸祭器具
（本店）
東京都千代田区3番町1の1
（支店）
京都市上京区室町通中長者町上ル555

絵馬・御札の製造販売
株式会社 晃栄商会
代表取締役 小杉貞治
〒321－14 本社 栃木県日光市御幸640番地
TEL 日光 0288(53)4186(代)

ちにも有意義な座談会等がありました。出席者一同今後の支部懇談会がより一層の発展を期して解散しました。次期支部懇談会は下都賀支部が会場となります。

念願の初優勝成る！

一都七県神社庁親善野球大会

去る七月十日、第十八回一都七県神社庁親善野球大会が神奈川県営保土ヶ谷球場で盛大に開催された。本県よりも江部参事及び人見監督以下選手十一名（むすび会員）が参加した。毎回苦しい試合の連続であったが、人見監督の名采配と各選手の精一ぱいの好打・好守の活躍により見事念願の初優勝の偉業を達成した。過去、何度となく快勝に進んだが、最後の一歩で涙を飲んで準優勝に甘じていたゞけに誠にうれしい極めであった。

（柳田記）

一回戦	対山梨県	4—2
準優勝	対茨城県	9—4
決勝	対東京都	6—3

〈賞〉

勝利監督　人見　昇三

最高殊勲選手　柳田　文司

最優秀投手　佐藤　義一

むすび会特別部員名簿

広報部

〈部長〉阿久津誠生〈副部長〉日野郁夫

多田民男・越口正一・早乙女昭司

武内重陽・柳田文司・高藤晴俊

阿部康夫・稲寿・上野喜則

企画部

〈部長〉柳田耕太〈副部長〉中麿輝美

下妻良夫・神山佳也・葭田孝

新井健志・斉藤哲男・大塚忠

渉外部

〈部長〉重田正美〈副部長〉荒井清勝

重田興次・若松豊明・月江寛智

斉藤隆夫・沼部正昭・池田清

田辺一丸

会費納入のお願い

本会活動の基本とはる会費を一月末日迄に御入納下さい。

納入方法

◎郵送の場合

〒三二〇

宇都宮市馬場通り一丁目一番一号

二荒山神社々務所内

若松豊明行

◎銀行振込の場合

足利銀行宇都宮支店

口座番号　普通六七七—五〇四

栃木県青年神職むすび会

日光二荒山神社
男体山頂鎮座一二〇〇年祭

日光二荒山神社は太古悠遠の世、関東平野の北方に聳える二荒山（別名男体山）の神霊を奉斎したことからその源を発した、我国屈指の名社である。

奈良時代の末、天応二年三月（西暦七八二年）下野の僧、勝道上人が難行苦行の末、人跡未踏の二荒山に初登頂し、山頂に二荒山の大神を拝し、小祠を営んで奉拝したと伝えられる。

この時から算えて、昭和五十七年（西暦一九八二年）が正しく一二〇〇年に相当するため去る昭和四十七年に奉賛会が結成され、発足以来氏子崇敬者等各方面の格別の御奉賛を仰ぎ、幾多の記念事業が完遂され、社頭の威厳も新たに、弥生祭（例祭）、田体山登拝祭に併せて、盛大なゆ記念大祭が斎行され、数々の奉祝諸兄の御理解と御協賛を会員諸兄の御理解と御協賛をお願い致します。

日光二荒山神社
男体山頂鎮座一二〇〇年祭記念大祭概要

1. 一二〇〇年祭記念大祭
　昭和五十七年四月十三日～十八日
　記念大祭　　四月十七日斎行
　奉祝一二〇〇年祭　　四月十八日斎行
2. 一二〇〇年記念夏季大祭
　昭和五十七年七月三十一日～八月七日
　記念夏季大祭　七月三十一日
　奉祝夏季大祭　八月一日

十月一日付を以って宇都宮二荒山神社権祢宜を命ぜられ過日着任致しました。東照宮奉職中は格別の御懇情を賜り深謝申上げます。
今後とも宜しく御高誼と御指導御鞭撻の程願上げます。

阿部　憲

五十六年度中央研修会
○五十七年　四月二十二・二十三日
○於札幌市　札幌共済サロン
○本県より七名参加予定

神青協総会
○五十七年　六月十九日
○於沖縄ハーバービューホテル
○復帰十周年記念として十八日各県砲前にて慰霊祭奉仕
○本県より五名参加予定

編集後記

○数年未刊であった会報（第八号）が今般できましたのでお届けいたします。
○今回は、早乙女氏青会長を始め、徒歩で伊勢詣りされた黒川前会長（神青協副会長）の体験記重な行事報告・奉仕神社紹介など多数の御寄稿と過日行われた関東ブロックでの樋口清之先による記念講演録の掲載により充実したものになった。
○先生並に御寄稿いたゞいた方々に厚く御礼申しげます。今後とも皆々様の御寄稿をお願いいたします。
○愈々年末年始の多忙の折、会員諸氏の御健康と御活躍をお祈り申上げます。

――編集委員――